

第五話 そんなに笑うなら、お前の番な

「昨日の声、録音しておけばよかった〜〜！」

片岡みなみは、翌朝からテンションが高かった。

大学の講義中もノートそっちのけで柴崎くんの悶え声を脳内再生。

「んっ……やっ……」

（いやマジでえっちすぎた）

自分で訓練しておいてなんだが、思い出すだけでニヤニヤが止まらない。でも、これが後々自分の首を絞めることになるとは、その時のみなみは知る由もなかった。

夜、閉店間際の「ゆらの湯」。

脱衣所の片付けをしていたみなみの背後に、ぬるつと現れた人影。

「……おい」

「うわっ、出たなチクビザコー!」

「その呼び方やめろ。マジで」

「え、なに? もしかして反論ある? 自覚ない? こないだのアレ
夢だった?」

柴崎くんは無言で一步近づいてきた。

「……お前、めちやくちや笑ったよな」

「だっておもしろ……いや、かわいかったから」

「かわいかった、ねえ……」

柴崎は静かに脱いだ上着を投げ捨て、ジャージのポケットに手を突っ込んだまま言う。

「……お前の番、な」

「は？」

「人の乳首いじって散々遊んだんだから。今度はこっちが探してやるよ、お前の“弱いところ”」

「ちよ、ちよっと待って！？ 意味わかんない！ 私別にどこも弱くないし鉄壁だし！？」

「は？ 自信あんの？ 言ったな？」

「ま、待って！！心の準備ってものが――」

その瞬間、柴崎くんはみなみの手首をひよいと掴み、畳敷きのスタ
ッフ休憩室へずるずる連行した。

「……ここでやるの？」

「俺が受けた屈辱を、そのまま返すだけ」

「屈辱とか言うのやめて！？私けっこう真面目にやってたんだか
ら！エロい顔とか見せられたらそりや笑うでしょ！？」

「うるせえ、脱げ」

「服は脱がない！！！！」

「……じゃあこのままな」

そう言って、柴崎くんはみなみの後ろに回り、首のうなじに、ふつと息を吹きかけた。

「っ……………!?!」

体がびくつと跳ねる。

「……………あ、今反応した」

「いやいや今のは不意打ちだから! 私の弱点じゃないし!」

「じゃあ確認な。もう一回」

また吹きかけられる。

「っ、んう……………ちよつと、くすぐった……………いってば……………!」

「うなじ……………仮エントリーだな」

「ちょっと待って、エントリーしないで、やめて！遊びじゃないって、これもう事故！！」

柴崎は構わず、今度はみなみの耳に指先をそっと滑らせる。

「っ……ひっ」

「耳も……だな」

「ちょ……そこダメ……っ！なにその触り方、変な声出る！」

「出てるし。めっちゃ色っぽい声出たし。言っとくけど録音してないの優しさだからな」

「最低すぎる……っ！」

みなみは抵抗するが、すでに首まわりが熱くなって、